

## さけます情報

## 北太平洋と日本におけるさけます類の資源と増殖

さとう えくお  
佐藤 恵久雄（北海道区水産研究所 業務支援課）

## 2013年の北太平洋

## 漁獲数

2014年のNPAFC科学調査統計小委員会(CSRs)における各国の報告によると、2013年1-12月の北太平洋の漁獲数は5億8,602万尾で、前年4億6,482万尾の126%でした(図1A)。

これを魚種別に見ると、カラフトマスが最も多い4億1,827万尾で全体の71%を占めています。次いでサケが1億641万尾(構成比18%、前年比110%)、ベニザケが4,956万尾(構成比8%、前年比91%)と続き、これら3魚種で全体の約98%を占めています。ギンザケとマスノスケは、それぞれ1,010万尾(前年比178%)、163万尾(前年比111%)となりました(図1A)。地域別では、アラスカがカラフトマスの記録的な豊漁により2億8,325万尾と最も多くなり、以下、ロシア2億

2,657万尾、日本5,233万尾、カナダ1,445万尾、アラスカ以外の米国(ワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州)931万尾、韓国10万尾と続いています(図1B)。

## 人工ふ化放流数

2013年1-12月に各国から人工ふ化放流された幼稚魚数は49億5,186万尾で、前年50億2,995万尾の98%でした(図1C)。

魚種別ではサケが31億1,216万尾で6割以上を占め、これに次ぐカラフトマス12億5,419万尾と合わせると全体の9割近くを占めます(図1C)。地域別では日本が17億2,852万尾、アラスカ15億6,192万尾、ロシア10億3,906万尾、アラスカ以外の米国3億1,917万尾、カナダ2億9,348万尾、韓国971万尾となっています(図1D)。

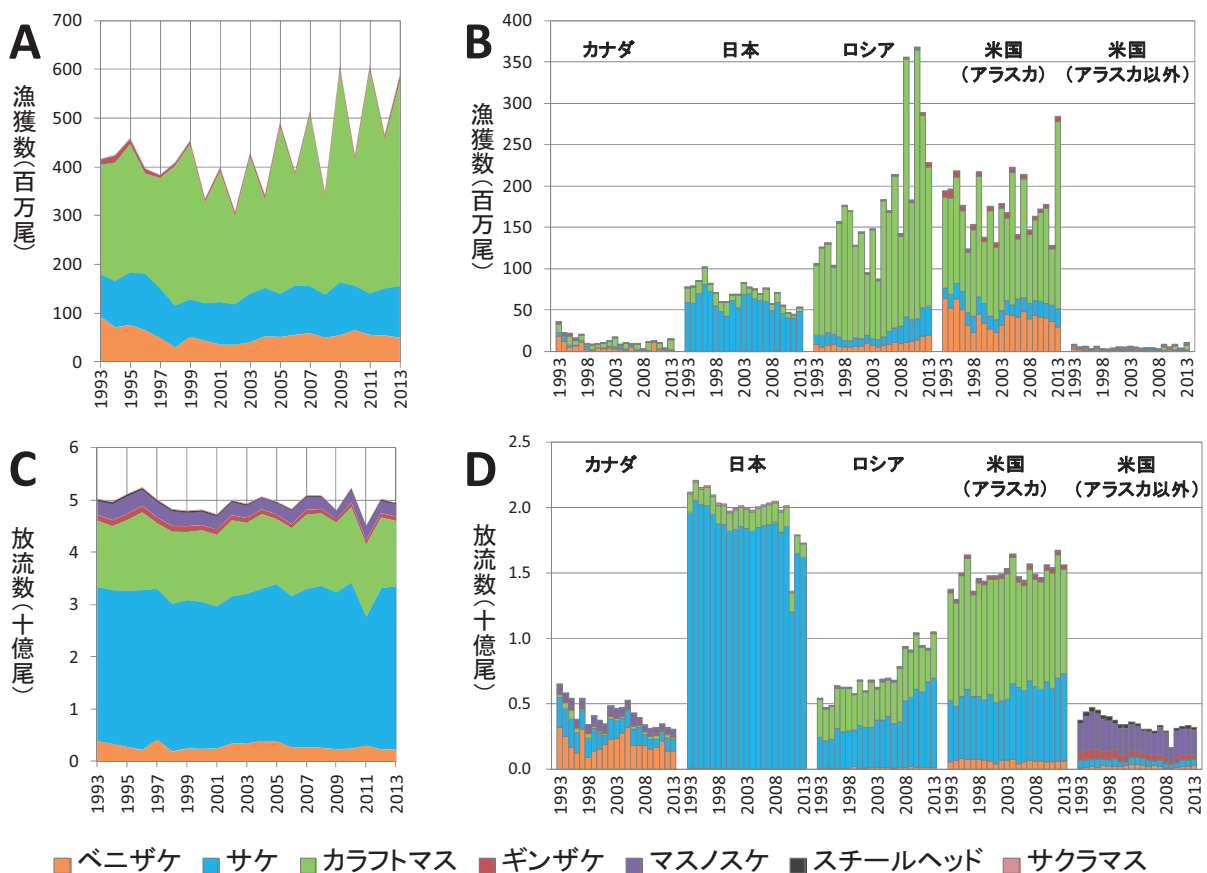


図1. 北太平洋におけるさけます類の魚種別漁獲数(A)、地域別魚種別の漁獲数(B)、魚種別人工ふ化放流数(C)及び地域別魚種別の人工ふ化放流数(D)。1993-2010年は「NPAFC Statistical Yearbook」による確定値。2011-2013年はNPAFC年次報告等で示された暫定値。1998年までのロシアにはEEZ(排他的経済水域)で他国が漁獲したものを含む。アラスカ以外の米国はワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。韓国は他国に比べ漁獲尾数・放流尾数ともわずかなため図中では省略している。

## 2014年度の日本

### サケ

2014年度の来遊数（沿岸漁獲と河川捕獲の合計）は12月31日現在で4,444万尾、前年度同期比86%となっています（図2）。今年度は、東日本大震災で被災した年級が4年魚として回帰するため、本州で大幅に減少する懸念がありましたが、幸い前年度並みの来遊がありました。総採卵数は12月31日現在で20億3,010万粒、前年同期の100%となっており、計画を満たす採卵数が確保されていることから、放流数も計画（約17億4,000万尾）と同等数になるものと見込まれます。

### カラフトマス

主産地の北海道における2014年度来遊数は161万尾で前年度比49%でした。カラフトマスは来遊数が隔年で変動する特徴があり、2003年度以降、奇数年は豊漁年、偶数年は不漁年にあたります。今年度は不漁年の年回りですが、そのなかにあっても特に少なく、来遊数が200万尾を割り込むのは1986年度以来のことです。総採卵数は1億3,200万粒と計画数の78%に留まっており、放流数も計画（約1億3,600万尾）を下回る約1億1,000万尾ほどになると見込まれます（図3）。

### サクラマス

2014年度の北海道における河川捕獲数は5,677尾で前年度比84%となりました。2000年度以降の捕獲数に大きな年変動が見られ、今年度は前年に続き、比較的少ない捕獲数でした。採卵数は495万粒でそ上系サクラマスの計画数392万粒を充分満たす数となりました。なお、2011-2014年度の本州河川捕獲数については現在確認中です（図4）。

### ベニザケ

2014年度の北海道3河川（安平川・静内川・釧路川）における河川捕獲数は271尾で前年度比75%となりました。

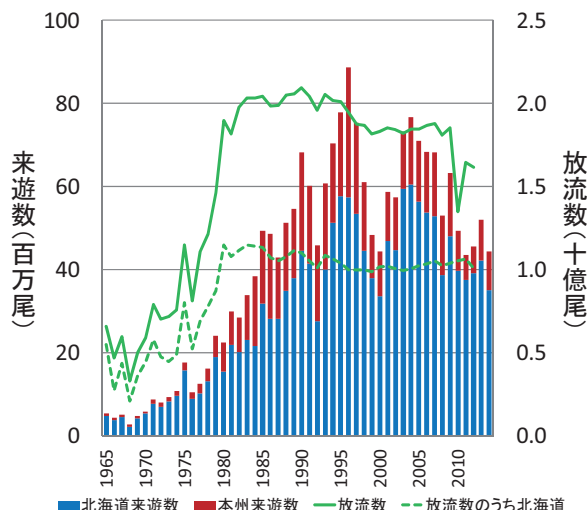


図2. 日本におけるサケの来遊数と人工ふ化放流数. 2014年度来遊数は12月31日現在. 2010年度の放流数は岩手県、宮城県を含まない.

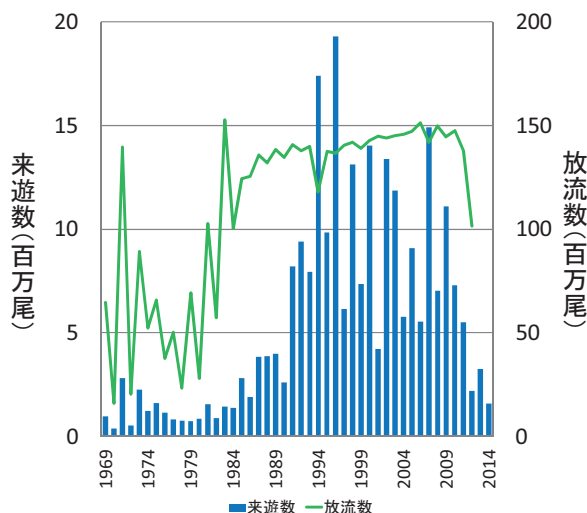


図3. 日本におけるカラフトマスの来遊数と人工ふ化放流数.

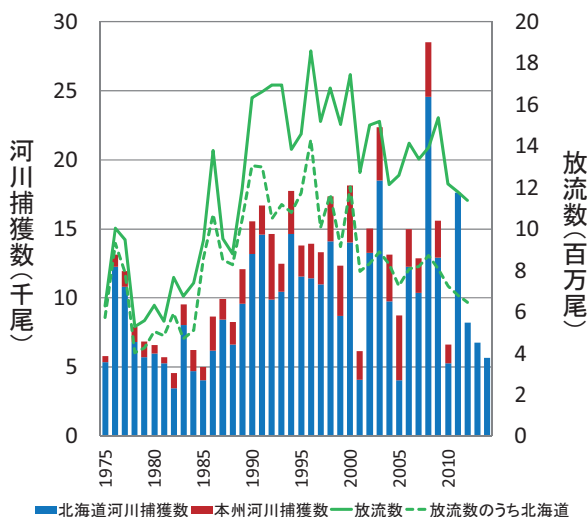


図4. 日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数. 2011-2014年度の本州河川捕獲数は確認中.